

若手研究者育成セミナー参加レポート

若手研究者育成セミナーを通して

檀上 洋右

(山梨大学 医学部医学科 3年)

山梨大学医学部大学院総合研究部 薬理学講座)

山梨大学医学部大学院総合研究部薬理学講座に所属しております、檀上洋右と申します。今回の神経化学会および若手研究者育成セミナーに参加させていただきました。その際に私が感じたことを少しお伝えできればと思います。

私は現在、山梨大学薬理学講座の小泉修一教授のご指導の下で、アストロサイトによるシナプス形成・神経回路再編メカニズムの研究をしています。ここ山梨はたいへん自然豊かな場所で、研究室を一步外に踏み出せば、見渡す限り山しかありません。夏の訪れに合わせて、生い茂る木々の緑は深さを増します。秋の訪れに合わせて、森は紅のドレスに衣替えます。冬になれば、峰嶺の頂には白銀の幕がおりて、また一年が経ったことを如実に感じさせてくれます。

青々とした瀬戸内海に抱かれて育った私にとって、山梨での生活は、憂鬱に感じざるを得ないときがあります。そんな私の閉ざした心に差す一点の光は、もしかしたら顕微鏡下で見える小さな小さな蛍光なのかもしれません。

レンズの向こうには、無限の“ミクロ”の世界が広がっています。ニューロンであろうとグリアであろうと、全く同じ姿かたちの細胞は一つとしてなく、それぞれが個性あふれる顔立ちで私を迎え入れてくれます。そして私はまるで取り憑かれたかのように、それらの細胞ひとつひとつの顔を見て、比べて、孤独な撮影会を始めるのです。レンズの向こうの世界では、色は1つか2つ、多くて3つです。でもそこには多くの情報が隠れています。そんな夢の時間も、すぐに終わりがきます。固定標本なら退色とともに、カルシウムイメージングなら細胞の死とともに。

そうした、一刻の顕微鏡の世界を楽しむとする私にとって、奈良県立医科大学の和中先生のお話は、非常に貴重で意義深いものとなりました。和中先生は、形態学研究のおもしろさを、グリア細胞の構造とともにお話してくださいました。グリアやニューロンの解析における時空間的アプローチの重要性は日々痛感していたつもりでしたが、再度、心に刻むこととなりました。画像で一目見て伝わるインパクトというのは、微細な構造に焦点をあてた研究の強みであり、最もおもしろい点だと思いました。一括りにされてまとめられている細胞や集団でも、よくよく調べれば均一ではないというのは、わかっているようで、理解しきれていなかったと、和中先生のデータを見ていて痛感しました。

また、慶應義塾大学の岡野栄之先生は、Musashi 遺伝子のお話から、ALSの研究、iPS細胞を用いた研究と臨床応用への展望まで、岡野先生ご自身のキャリアや時世の流れとともに、面白おかしくレクチャーしてくださいました。基礎研究として培った知見を、さらに臨床の現場へと還元しようと尽力なさっている岡野先生の姿を見て、非常に感銘をうけました。私自身も自分の研究を、臨床の場に応用されるところまで持って行ってみたいと強く思いました。

先生方のレクチャーの後は、軽く食事をしながらのフリーディスカッションの場がありました。他の学生がどういう環境で、どのくらいのモチベーションで、どういう研究を行っているのかや、直接先生方にお話を聞くことができる貴重な機会となりました。私個人としては、たわいない会話の中でも、研究のヒントというのは意外と転がっているものだなあと驚きました。

最後になりましたが、慶應義塾大学の田中謙二先生をはじめ、若手育成セミナーの開催にあたり準備・運営等ご尽力してくださった先生方、関係者の皆様、貴重な機会をありがとうございました。また、このように若手育成セミナーについて執筆の機会をいただきまして、大変ありがとうございました。若手育成セミナーを経て、私が感じたこと、得られた知識や知恵を、今後の研究活動に存分に生かしていきたいと思います。

